

取組実績の概要（2ページ以内）

本事業は、学生の生涯学び続ける学修意欲の向上と知識・技能の定着、及び地域社会に貢献する力を育むことを目的として、『比治山型アクティブ・ラーニング』の構築と実践（テーマⅠ）と「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」（テーマⅡ）とを複合的に行うものである。そのねらいは、学生に学びの充実感・成就感を実感させることにある。

両者の複合・融合によって、可視化される学修成果を学生自身に活用させることにより、「自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのか」という自身の強みを意識化させ、自己理解・肯定感を高めて社会に接続させる。また本学にとっては、さらなる教育改善の一階梯と位置づけ、今まで積み重ねてきた教育改革の経験と実績を、教職員・学生・地域が一体となった連携の中で再編・再構築し、地方の私立大学・短期大学併設型の小規模学園の教育システムの最適モデルとして実践・提供することを目指している。

平成 26(2014)年度は準備段階、平成 27(2015)年度は実施第一段階、平成 28(2016)年度は本格的運用段階、平成 29(2017)年度は発展的運用段階、平成 30(2018)年度は検証・改善段階、令和元(2019)年度は上記の目標に向けてこれまで実施してきた事業を完成・発展させる段階と位置付けて本事業を実施した。

【「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）】

「比治山型アクティブ・ラーニング」とは、学生の学ぶ意欲を引き出すため、体験や参加によって主体的に考えるきっかけをつくる授業展開であり、一方的な知識伝達型の授業を聞くような受動的な学習を乗り越え、学生自身による主体的・能動的で対話的な学修を通して「深い学び（ディープ・ラーニング）」へと導くものと定義して、アクティブ・ラーニング型授業の全学的な推進を図った。

この、学生の“learning by doing”の全学的な推進を通して育成したい力を、本学の建学の精神「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する」にもとづき、「自立」「想像」「共生」「創造」（4つのキーコンピテンシー）として抽出し、さらにこれらを学生の学修アクティブ・ラーニングスキルの段階として捉え、各キーコンピテンシーを3つのスキルに編成・具現化した。これが本学において全学的に育成する汎用的能力であり、「4×3の比治山力」と呼んでいる。

本事業以前には、教員はそれぞれに学修支援的な「アクティブ・ラーニング」を実践してきた実績がある。それらを「4×3の比治山力」を到達目標とする「比治山型アクティブ・ラーニング」として再編成し、授業参観やレッスンスタディ、ワークショップといった全学 FD・SD による授業改善を行うことにより、本学のさらなる教育改善・改革に資することができた。

この「4×3の比治山力」を到達目標として設定し、共通教育科目や各学科専門科目の中で、これらのスキルの育成を目指す科目群を「コア・アクティブ・ラーニング（コアAL）科目群」とし、これらによる学修が、全体への学修意欲の向上と知識・技能の定着、汎用的能力の育成に効果を及ぼすよう、系統的・体系的な教育課程として編成し、これを「比治山型アクティブ・ラーニング」として全学的に再生加速した。

「比治山型アクティブ・ラーニング」の特徴は、キーコンピテンシーの基礎となる導入部分「学びの主体者としての自分の実感」を重視し、学生を一人ひとり丁寧に学びに誘うところにある。まずは初年次教育、専門基礎教育から始め、学年を重ねる毎に学生が自らの学びを能動的・主体的に加速化し、最終的には「リフレクティブ・ラーニング」による学びの振り返りやリファインを通して、自身の強みを意識して地域社会に貢献できる力を育む「比治山型アクティブ・ラーニング」を構築した。

【評価指標モデルの構築と学修成果の可視化（テーマⅡ）】

「コアAL科目群」から上記の「4×3の比治山力」を到達目標とした「比治山型アクティブ・ラーニング」を全学的に波及させていくために、本事業では同時に「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」（テーマⅡ）にも取り組んだ。

「評価指標モデルの構築」については、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果検証のため、本学独自指標として「比治山力レポート」（学生対象）、「4×3の比治山力 リフレクションシート」（教員対象）、「新規採用者のスキルに関する調査」（卒業生就職先対象）の開発を行い、従来からの

（テーマ：Ⅰ・Ⅱ複合型、大学等名：比治山大学・比治山大学短期大学部）

「大学生基礎力レポート」「学生による授業に関するアンケート調査」(学生対象)等とともに毎年度実施した。これらの指標を組み合わせてモデル化することで、学生の学修状況や意欲を含めた包括的な学生の学びや、大学生活を通じていかに成長し、どのような能力やスキルを身につけたかという成長過程を数値化・グラフ化して全学的に検証・改善を行った。

また、「学修成果の可視化」については、可視化によって、学生の能動的・自主的な学びへの意欲の向上を図った。そのための手段として、学生情報システム「Hi!way (ハイウェイ)」に学生自身による学修活動のPDCA サイクルの確立を支援する仕組みとして「Hi!step (ハイステップ)」・「Hi!check (ハイチェック)」機能を取り入れた。これにより学生が常に web 上で自身の成果と課題を把握し、次の学びを計画していく力を育みつつ、自身の強みをより意識した自作ポートフォリオ(e-ポートフォリオ)として可視化し、自らの学びに支えられた自己肯定感を育むことができた。また卒業時の学修成果を可視化するツールとして「比治山型ディプロマ・サプリメント」を構築した。教職員はこれらの可視化される情報を活用した学生ガイダンスを充実させ、丁寧に学生に向き合うことができた。

【二つのテーマの融合】

以上のように、本事業はテーマⅠ・Ⅱを複合・融合させることにより、最終的に「自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのか」といった自身の強みを意識化させて自己肯定感を高め、学生の生涯学び続ける強い学修意欲の向上と知識・技能の定着、生きる力としての汎用的能力「4×3の比治山力」をもって、地域社会に貢献する力を育むことができた。

【必須指標の達成度】

	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
AL を導入した授業科目数の割合(大学)(科目/科目)	未測定	100%	98.7%
AL を導入した授業科目数の割合(短大)(科目/科目)	未測定	100%	97.9%
AL 科目のうち、必修科目数の割合(大学)(科目/科目)	未測定	30.0%	37.5%
AL 科目のうち、必修科目数の割合(短大)(科目/科目)	未測定	21.0%	23.2%
AL を受講する学生の割合(大学)	未測定	100%	97.2%
AL を受講する学生の割合(短大)	未測定	100%	97.8%
学生 1 人当たり AL 科目受講数(大学) 科目(人/人)	未測定	20.0	19.6
学生 1 人当たり AL 科目受講数(短大) 科目(人/人)	未測定	24.0	25.8
AL を行う専任教員数(大学) (人/人)	未測定	100%	100%
AL を行う専任教員数(短大) (人/人)	未測定	100%	100%
学生 1 人当たりの AL 科目に関する授業外学修時間(大学・短大)	未測定	3.0 時間	1.2 時間
退学率(大学)	3.7%	4.0%	2.8%
退学率(短大)	1.6%	2.0%	1.3%
プレースメントテストの実施率(大学・短大)	99.0%	100%	100%
授業満足度アンケートを実施している学生の割合(大学・短大)	100%	100%	100%
授業満足率(共通教育)	4.06	4.25	4.17
授業満足率(大学)	4.22	4.25	4.26
授業満足率(短大)	4.23	4.30	4.40
学修行動調査の実施率(大学・短大)	100%	100%	100%
学修到達度調査の実施率(大学・短大)	100%	100%	100%
学生の授業外学修時間(大学)	7.9 時間	24.0 時間	11.7 時間
学生の授業外学修時間(短大)	7.9 時間	24.0 時間	14.7 時間
学生の主な就職先への調査(大学・短大)	無	100%	100%

※AL：アクティブ・ラーニング